

## William G. Harrington

成田 博

もともとはLEXISという名で始まったLEXISNEXISの開発に大いに貢献したのは弁護士William G. Harringtonであった。Harringtonは、1931年にオハイオ州Mariettaで生まれ、1953年にMarietta Collegeを、1955年にDuke Universityを、そして、1958年にOhio State University College Of Lawを卒業して弁護士となり、LEXISの開発に関わった。Harringtonが1985年にLaw Library Journalの77巻3号543頁以下に発表したA Brief History of Computer-Assisted Legal Researchは、この分野では必ず引かれる文献になっている。

最近、LEXISの開発に携わったあと、Harringtonは、どこでどのような暮らしをしているのだろうかということが頭を過ぎって、インターネットで検索をしてみたところ、Harringtonは小説家でもあることが分かった。小説家としての代表作は1982年のThe English Ladyであるらしい。そのほか、国立国会図書館のサイトでは、『刑事』(村社仲訳)(1974年、角川文庫)、『強行着陸』(吉川正子訳)(1992年、講談社文庫)のほか、驚いたことに、W.リンク=R.レビンソン=ウイリアム・ハリントン『刑事コロンボ〈血文字の罟〉』(谷崎晃一訳)(1999年、二見文庫)がヒットする。「驚いたことに」などと書くと、推理小説好きの人たちに「何たる無知!」と言われるのかも知れないが、今のいままでLEXISの開発に関わったHarringtonが「刑事コロンボ」に関係があるなどは夢にも思っていなかった。

幸いなことに上記翻訳3冊は手に入れることができた。まず、『刑事』の「あとがき」には、「作者のウイリアム・ハリントンは作家であると同時にオハイオ州コロンブス市のオハイオ法曹協会弁護士 [= オハイオ州弁護士会所属の弁護士 = 成田注] を兼ねている」とあって(609頁)、弁護士のHarringtonと小説家のHarringtonとが確実に重なった。続いて、『強行着陸』の「訳者あとがき」を見ると、「著者のハリントンは『サスペンスとプロットの大家』と絶賛されるサスペンス小説の第一人者で、すでに十四冊の著作を世に問うています」とある(496頁)。この小説の原題は“Virus”でコンピュータに関わる話である(ざっと目を通しただけだが、「NEXISで調べさせた。……。ヨーロッパで発行されているあらゆるビジネス誌を検索するシステムだ」という箇所がある(365頁))。しかし、『刑事コロンボ〈血文字の罟〉』の「あとがき」にはHarringtonの解説はなく、『刑事コロンボ』に関わることはわからないままである。どなたかコロンボに詳しい方のご教示を得たい。

実を言うと、こうしたことが分かったきっかけはNew York Timesの記事である(<http://www.nytimes.com/2000/11/16/arts/william-g-harrington-68-wrote-mysteries-and-thrillers.html>)。これは追悼記事なのだが、最初に見たときは同姓同名の人のニュースとしか思わず、そのままに放置した。しかし、何度検索してみてもこの記事が一番先に出てきて、「念のために」と思って読んでみたところ、LEXISという語が目飛び込んできて、ようやく「あの」Harringtonだと納得した次第である。亡くなったのは、西暦2000年、コネチカット州グリニッジの自宅においてであった。あとは、直接、上記New York Timesの記事を参照されたい。